

《修士論文要旨》

「陶邑窯における須恵器生産と集落変遷の研究」

小 原 雄 也*

大阪府陶邑窯跡群（以下、陶邑窯という）は古墳時代から平安時代まで連綿と須恵器生産がおこなわれた国内最大規模の窯跡群である。1960年代のニュータウン開発に伴い、窯跡が所在する泉北丘陵（以下、丘陵という）の全体に発掘調査がおよび、これまでに多大な資料の蓄積とともに陶邑窯における須恵器生産の一角が明らかとなった。

古墳時代の陶邑窯では丘陵内で異なる工人集団や生産体制が独自に展開したという見解がある。これは窯構造や製品の形態・製作技法に地域的な特徴が見いだせ、こうした地域差は工人集団とこれを統括する王権・首長との支配構造が影響するという視点からである。一方で窯構造や製品にみる地域差は工人集団を隔てるほどの大きな差異はないという見解もあり、陶邑窯における工人集団の存在形態を明らかにすることが課題となる。

古墳時代の陶邑窯における地域性と生産構造の研究課題に対して、TK208～TK47型式の窯跡を対象に短脚高杯の形態・製作技法の分類と各窯における出土傾向を分析する。その結果から短脚高杯ⅠB類（以下、ⅠB類という）が丘陵西地域（榎・光明池・大野池地区）にかぎり生産され、東地域（陶器山・高蔵寺地区）では出土が確認されないことが判明した。さらに西地域の窯跡ではⅠB類とならび東地域の窯跡で主要形態となる短脚高杯ⅠC類が多く生産される状況がみられた。こうした東西地域における生産の共通性から陶邑窯では工人の活動を隔てる生産構造はみられないと考えられる。

西地域の工人集団にはⅠB類やロクロの回転方向にみられる古い要素を持った生産技術を比較的長期にわたり維持する傾向がみられ、こうした背景に地域性が表出すると推測する。陶邑窯における地域性はあくまで工人集団の技術面における特色を示したものであり、先行研究における王権・首長による工人集団の支配構造が地域的に異なるという解釈は困難であることが判明した。

また、西地域で生産されたⅠB類が集落遺跡へ流通する状況を整理することで、陶邑窯の生産体制について検討する。その結果から丘陵に所在する集落遺跡の特徴が①集落が河川や谷間に形成されること、②10㎡未満の小型掘立柱建物が多く存在すること、③須恵器生産の工具や窯道具がみられること、④生産時に大きく歪んだ製品や破損が生じた製品などのいわゆる失敗品が多く出土することが判明した。こうした特徴は一般集落ではみられず、丘陵の集落遺跡は須恵器生産に関連する集落（以下、生産関連集落という）であることが推定された。丘陵における生産関連集落は窯跡で生産された製品の集積・保管ならびに仕上がりの点検をおこなう流通拠点としての機能が復元できる。

生産関連集落において西地域特有のⅠB類の分布状況をみると、ⅠB類の生産がみられない東
平成23年度 *文学研究科文化財史科学専攻

地域の生産関連集落からも出土が確認された。特に丘陵中央に位置し、東西地域の境界となる石津川沿いの生産関連集落からの出土が確認されることから、製品を集積・保管する段階では窯跡の製品が地域的に区別されないことが判明した。すなわち、陶邑窯の地域性が必ずしも限定された勢力や流通機構を示すものではなく、工人集団が保持する生産技術面での差異であることが推定され、陶邑窯における生産体制は丘陵内の地域を隔てない大きく一元化された状況であったことが検証された。